



心のケアに追われた日々

山形県高等学校障がい児学校教職員組合 鈴木 久仁子(養護教諭)

15年前、新校舎への移転を間近に控えた古い校舎では、映画の撮影が行われていた。田舎町は、学校は勿論のこと、地域全体が興奮していた。現在のようにSNSで世界と簡単に繋がることが出来る時代ではなかった。画面の向こう側の俳優たちが校舎の中を歩いている。日常が非日常に一変していった。

全国ロードショー前の試写会。生徒達の盛り上がりは最高潮で、夢見心地。私は現実と非現実の境界が曖昧になる不安を感じていた。

試写会の数日後、失恋を苦しめた男子生徒が校舎で自らの命を絶った。学校全体が戦場のような悲惨な現場となった。夢なのか、現実なのか、私の感覚はしばらく麻痺していた。

「心のケア」という言葉は、多くの自然災害・人為災害が日常化してきている現在ではよく耳にするようになったが、その当時、教育コミュニティへの緊急支援に関する知識は少なかった。その事故を受けて県教委や県心理士会が動き始め、緊急支援に関するシステムが構築されていっ

た。2006年、新校舎に移転した年の初冬、再び痛ましい事故が起きた。連日のようにセンセーショナルに報道される「いじめ自殺」事件の過熱した報道に背中を押されるかのように、遺書を残して一人の女子生徒が新校舎内で亡くなった。

群発自殺を恐れ、「WHO自殺報道ガイドライン」を踏まえた報道をお願いしたいと報道関係者に各方面から訴えたが、数か月後に遺書が公開された。生徒たちの心は深く傷つき、心のケアに追われる日々が続いた。

あれからかなりの年月が経った今、報道のされ方に変化はあるのだろうか。NPO ライフリンク(自殺対策支援センター)代表・清水康之さんの「自殺報道に関する要望書」をネット上で見つけた。2年前にでていうことは、依然課題は多いのだろう。ネット上でも報道の仕方に関する意見は様々だ。しかし、自殺連鎖の被害者はどうかつくりたくない。天国の彼女と共に強くそう願う。